

労働科学研究所旧蔵森戸文庫

小池, 聖一 / Koike, Seiichi

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

692

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

9

(発行年 / Year)

2016-06-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013173>

労働科学研究所旧蔵森戸文庫

小池 聖一

- 1 森戸辰男旧蔵資料の全容
- 2 労働科学研究所森戸文庫

労働科学研究所の第二代理事長であった森戸辰男と労働科学研究所との関係は、戦前の大原社会問題研究所時代に始まる。労働科学研究所の前身、倉敷労働科学研究所は、大原社会問題研究所の社会衛生部門が分離独立したものであった。特に女子労働を研究対象としていた森戸は、姉妹研究所ともいべき倉敷労働科学研究所及び、暉峻義等所長等と緊密な関係・親交を保った。その後、倉敷労働科学研究所も大原社会問題研究所同様、東京に移転し、昭和16年（1941年）10月、大日本産業報国会に統合された。戦後、昭和20年（1945年）9月、大日本産業報国会解散にともない労働科学研究所も解散となり、同年11月、文部省所管の財団法人労働科学研究所として再建されている。この後、資金不足から経営難となったが、森戸の尽力により、昭和26年（1951年）に施行された「民間学術研究機関助成に関する法律」の適用をうけ、国庫補助金をうけて経営が安定し⁽¹⁾、文部科学省所管の学術研究法人として存続した。労働科学及び労働科学研究所の存在は、自らの遍歴とも類似したこともあり、森戸は長く理事として、昭和34年（1959年）3月4日からは、第二代理事長に就任し、亡くなる昭和57年まで、その職にあった。それだけに、森戸の死後、寄贈された書籍・刊行物からなる労働科学研究所旧蔵森戸辰男関係資料には、特異な意味があると考えている。

1 森戸辰男旧蔵資料の全容

広島大学の初代学長でもある森戸辰男は、生涯自宅というものを持たなかった。このため役宅等を転々とする過程で収集していた書籍・資料・文書を勤務先に残し、あるいは、書籍等をふさわしいところに生前から寄贈していった。

森戸辰男旧蔵の文書と書籍等刊行物については、次頁の表のように寄贈されている。

(1) 財団法人労働科学研究所（1981）『労働科学研究所60年史話』220 - 221頁。

表 1 森戸辰男関係資料の所蔵状況

分類	所蔵機関	概要
書籍	広島大学図書館	和図書 2,942 点, 洋図書 3,127 点, パンフレット 1,712 点, 和雑誌 93 種, 洋雑誌 52 種など
	横浜市史編集室	図書など 1,087 点, 雑誌 1,774 点
	広島修道大学	和図書 580 点, 洋図書 300 点
	日本女子大学	洋図書 45 点, 洋雑誌 1 種
	獨協大学	洋図書 22 点, 洋雑誌 2 種
	国立国会図書館	和図書 134 点
	法政大学大原社会問題研究所	約 100 冊
	労働科学研究所	和図書 596 点, 洋図書 178 点, 和雑誌 120 種, 洋雑誌 15 種, パンフレット 141 点など
	富士政治大学校	和図書 933 点, 和雑誌 10 種など
文書	広島大学文書館	広島大学旧蔵文書 13,655 点, 森戸富仁子寄贈文書 8,714 点, 檜山家文書 143 点
	横浜市史編集室	森本松也寄贈文書 11,192 点
	法政大学大原社会問題研究所	櫛田民蔵書簡 80 通, 久留間鮫造書簡 21 通
	ふくやま美術館	日記等
遺品等	広島大学文書館	書簡, 写真, テープ等
	横浜市史編集室	写真, テープ等 402 点
	ふくやま美術館	叙勲関係, 写真, 書画等

出典：石田雅春「解題」(『横浜市所蔵森戸辰男関係文書目録』所収)。

基本的に、書籍等刊行物については、関係文書と本来一体化して所蔵されていた広島大学所蔵(文書館・図書館)及び横浜市所蔵のような場合と、日本女子大学等のように、生前に寄贈されたもの、そして、労働科学研究所旧蔵森戸文庫のように、森戸の死後に寄贈されたものとに分けることができる。

生前に寄贈された森戸辰男旧蔵書籍等の刊行物は、森戸が名誉学長であった広島修道大学には、経済関係の書籍が寄贈され、娘・洋子氏(檜山洋子氏)が学んでいた日本女子大学には婦人問題関係の書籍が寄贈されている。獨協大学にも天野貞祐学長(哲学者、京都帝国大学教授、文部大臣)および木田宏元文部次官(同大学の創設に関与した)との関係から哲学関係の書籍等が寄贈されている。また、戦後その創設に深く関与した国立国会図書館には教育関係の稀覯本が寄贈されている。この他、法政大学大原社会問題研究所には、『櫛田民蔵全集』にも採録された森戸宛の櫛田民蔵書簡(80 通)、久留間鮫造書簡(21 通)を含む資料とともに、初期労働運動関係の書籍が寄贈されている⁽²⁾。また、党首にも擬されたことのある民主社会党系であり、森戸が大阪労働学校で教えた西村栄一(衆議院議員、民社党第二代委員長)が初代学長となって昭和 44 年(1969 年)に開校した富士政治大学校・公益財団法人富士社会教育センターの附属図書館にも書籍等が寄贈されている。富士政治大学校附属図書館の森戸文庫は、主に、戦後の森戸が収集した政治・労働・教育・文

(2) 森戸宛櫛田民蔵書簡は、櫛田民蔵(1984)『櫛田民蔵・日記と書簡』社会主義協会出版局、に所収されている。



森戸辰男記念文庫のある広島大学文書館

化関係を中心とする幅広い書籍が寄贈されている。この点，以下で明らかにするように，死後に寄贈された労働科学研究所の森戸文庫とは，違った特色を有しているのである。

2 労働科学研究所森戸文庫

(1) 労働科学研究所旧蔵森戸文庫の概要

森戸の死後，森戸富仁子夫人より，労働科学研究所に，合計 1,498 点⁽³⁾，の和洋書等の刊行物が寄贈された。しかし，今回，労働科学研究所から移管された森戸文庫は，合計 1,455 点であった。不明の資料が 43 点ある。その内容は，多様であるが森戸が関係した日本国憲法制定に関する書籍等 17 点，那須皓関係の書籍 4 点，洋書が 13 冊，また，労働科学研究所森戸文庫唯一の文書である書簡二通（「一，ユネスコ総長よりの書簡（1976.5）」と，「二，住谷氏よりクロボトキンの手紙（1906.1）」）が含まれている。

具体的に，（財）労働科学研究所森戸文庫目録では，次頁表 2 のように分類されている。

内容を概観すれば次のように言えるだろう。書籍中には，森戸の著書も含まれている。基本的に，森戸と関係があった者の著書・伝記・研究書等が多く所収されている。森戸及び森戸と親しかった者の書籍は，初版が中心であり，個別に寄贈をうけた書籍等であり（謹呈署名のある書籍も含まれている），戦前の書籍も多い。森戸と関係があった者に対する研究書は，基本的に戦後の書籍等である。

具体的に，「0 総記」には，森戸の母校，福山誠志館高校（旧福山第一中学校）に関する書籍が所収されている。また，「1 哲学・心理学・倫理学」には戦後の書籍に交じって「国体学」関係の書籍が所収されている。これは，戦前期，森戸が自らの文化論を書くにあたって批判の対象とし

(3) 財団法人労働科学研究所図書館（1990）『（財）労働科学研究所森戸文庫目録』。

て読んだものであるが⁽⁴⁾、婦人問題、社会運動等については、寄贈先があったものの、これら「国体学」関係の書籍は、寄贈先がなくそのままになっていたものと考えられる。「2 伝記・地理」には、恩師である新渡戸稲造関係の書籍、第一高等学校・東京帝国大学の同級生川西実三の回顧録や、高野岩三郎・大内兵衛等の大原社会問題研究所関係者、西尾末広・西村栄一・住谷悦治等大阪労働学校・社会運動関係者の伝記等が所収されている。「3 社会思想・社会主義」には、森戸の著書とともに、河上肇、久留間鮫造、大内兵衛、大杉栄⁽⁵⁾の著書等が含まれている。「4 政治・法律」には、日本国憲法制定関係の書籍が所収されている。森戸は、「帝国憲法改正案委員小委員会」（通称芦田小委員会）の一員として日本国憲法制定に深く関与していた⁽⁶⁾。「5 経済学」も、戦前期、大原社会問題研究所時代関係者の書籍が中心である。「6 社会問題・社会政策」には、大原社会問題研究所の著書とともに、井上良二・桑島南海士等大阪労働学校関係者の著書等が含まれている。「7 教育」は、森戸が戦後、文部大臣・広島大学長・日本育英会会長・中央教育審議会会長等を歴任したこともあり、戦後の文教関係の書籍が中心である。例外となるのは、大学転落論争関係の書籍⁽⁷⁾、新渡戸稲造の『婦人に勧めて』が所収されている⁽⁸⁾。「8 衛生、公衆衛生学・産業」には、労働科学研究所関係の書籍も含まれている。「9 芸術・言語・文学」には、木下尚江の著書三冊が含まれている。

表 2 森戸文庫目録の分類

和書	洋書
0 総記	0 総記
1 哲学・心理学・倫理学	1 哲学・心理学・倫理学
2 伝記・地理	2 伝記・地理
3 社会思想・社会主義	3 社会思想・社会主義
4 政治・法律	4 政治・法律
5 経済学	5 経済学
6 社会問題・社会政策	6 社会問題・社会政策
7 教育	7 教育
8 衛生、公衆衛生学・産業	8 衛生、公衆衛生学・産業
9 芸術・言語・文学	9 芸術・言語・文学
和文雑誌	欧文雑誌
パンフレット	パンフレット
森戸先生講演録	
その他の講演録	
新聞切抜きファイル	

(4) 森戸辰男（1938）「知的動員と知識階級」『中央公論』第 53 巻第 11 号以降，同（1939）「戦争と文化」『改造』第 21 巻第 4 号等。森戸は，知識人を擁護するため文化論をもって国粋主義と対峙し，一方で，産業報国運動をドイツ労働戦線になぞらえて労働者の権利拡大を策していた。

(5) 大杉栄（1922）『クロボトキン研究』アルス。

(6) 小池聖一（2009）「森戸辰男からみた日本国憲法の制定過程」『日本歴史』第 728 号。

(7) 小池聖一（2012）「学問の自由と大学の自治をめぐる戦前と戦後」『日本歴史』第 772 号，55 - 71 頁，参照。

(8) 新渡戸稲造（1917）『婦人に勧めて』東京社。

和文雑誌は、雑誌『大原社会問題研究所雑誌』『我等』以外は、戦後の雑誌であり、文教・教育関係が中心である。

パンフレットには、森戸によるものを含め、多様な内容となっている。大原社会問題研究所時代に所蔵したと思われる戦前のものも多く含まれている。戦後のパンフレットは、文教・教育関係が中心である。

森戸先生講演録は、昭和11年の「ロッチデール主義ニ就テ」を例外として、その他は、昭和21年から昭和57年まで、森戸が行った講演録である。この「森戸先生講演録」は、生前、森戸が自ら編年で整理した中心論文、講演録集である。その他の講演録は、戦後の教育関係・政治関係のものが中心であり、新聞切抜きファイルには、森戸事件関係記事新聞切抜き（コピー）がある。

一方、洋書は、英文と独文のものが中心であり、英文の書籍は、戦後の教育関係が中心であり、独文の書籍は、戦前の社会科学系のものが中心である。

「0 総記」は教育関係で戦後の書籍。「1 哲学・心理学・倫理学」には、アルトゥル・ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer）、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche）等の著書が所収されている。「2 伝記・地理」には、新渡戸稲造の伝記⁽⁹⁾等が所収されている。「3 社会思想・社会主義」には、森戸がドイツ留学時、マルクス唯物論とカントの理想主義との結合という考え方に共鳴したウィーンのオーストリア社会党幹部マックス・アドラー（Max Adler）の著書、森戸事件により東大を追われることとなったクロボトキンの著書が含まれている。「4 政治・法律」には、エドワード・カーペンター（Edward Carpenter）の著書等が含まれている。「5 経済学」には、マルクスの著書が中心であるが、アダム・スミス、ローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg）の著書も含まれている。なかでも、森戸が東京帝国大学でドイツ人雇教師のハインリッヒ・ヴァンチッヒ（Heinrich Waentig）からもらったと考えられるドイツ歴史学派経済学者 カール・ビュッヒャーの著書も含まれているのが特徴的である⁽¹⁰⁾。「6 社会問題・社会政策」には、大正9年（1920年）秋、森戸事件で収監前の森戸が、提案した労働者等を対象とする大原社会問題研究所の社会問題研究読書会が開かれ、東京神田の基督教青年同盟会館三階で婦人を対象に行ったときのテキスト原本、J.S. ミルの『婦人解放論』（*The Subjection of Women*）も含まれている⁽¹¹⁾。「7 教育」は、戦後アメリカを中心とする大学関係の研究書、文教政策・教育に関する書籍が中心である。森戸は、広島大学長として外に開かれた大学を目指し、通信教育、夜間学部などをいち早く設置した。同時に、森戸は、国際大学協会の活動に熱心であり、理事としてアジア地域の代表でもあったことがこの書籍群からも理解できる。「8 衛生、公衆衛生学・産業」は報告書、「9 芸術・言語・文学」は日本関係の書籍が中心である。

欧文雑誌及びパンフレットは、戦後の大学教育関係雑誌が中心である。

(9) Yasaka Takagi・Shigeharu Matsumoto・Yoichi Maeda・Kiyoko Takeda・Makoto Saito・Yoshihiko Kobayashi (1972) "The Works of Inazo Nitobe Volume 1-5" University of Tokyo Press.

(10) Carl Bücher (1907) "Industrial Evolution" New York, Henry Holt and Company.

(11) テキストには、J.S. ミル著、大内兵衛訳（1923）『婦人解放論』同人社が使用された。

(2) 労働科学研究所旧蔵森戸文庫の特質

森戸は、生涯、二種の回顧録を執筆している。戦前と占領期までを詳細に書いた『思想の遍歴』と⁽¹²⁾、日本経済新聞「私の履歴書」に連載された『遍歴八十年』である⁽¹³⁾。

森戸は、この二種の回顧録を執筆するにあたり、手許に資料を置いて執筆したと考えられる。関係の文書類は、後に森戸富仁子夫人より、広島大学文書館に寄贈された。そして、手許に置いていた書籍・刊行物が、この労働科学研究所旧蔵の森戸文庫と考えられる。

このため、労働科学研究所旧蔵の森戸文庫は、前節で明らかにしたように、自伝執筆のための書籍群と、最晩年に手許にあった書籍群（教育関係の書籍）、そして、寄贈先のなかった書籍群という三つの部分によって構成されている。

詳細な内容を持つ『思想の遍歴』については、所蔵の文書も用いて実証的に書かれたものである。その際、森戸は、所蔵の書籍を再構成したと考えられる。一方、『遍歴八十年』は、前者に比較して、より一般を対象として執筆された概観的なものである。このため、執筆においては、研究者を意識した『思想の遍歴』とは違い、実証的につめて書くというものではなかった。『遍歴八十年』は、占領期までの前半生については『思想の遍歴』によっており、その後については、主に、教育との関係性が叙述の重点となっている。その際、参考の中核に置いたと考えられるのが、編年体で整理された「森戸先生講演録」であり、執筆に際して、これを補足するために他の書籍を利用したものと考えられる。

以上、明らかにしたように、労働科学研究所旧蔵森戸文庫は、自伝執筆を契機とする森戸の思想とその遍歴を明らかにするうえで根幹となる書籍・刊行物である。同時に、それを検証することも可能である。しかし、前者は、マルクス主義から離れたことを一つの主題としており、執筆時が、マルクス主義社会科学が学会の主流であった時期であったため、歯切れが悪いところも多い。また、自伝であるが故に、書かれているその論旨は、単線化されている。しかし、実際には森戸の人生は、より複線的であったように考えられ、改めて文書群も含めて精査し、また、他へ寄贈された書籍等を用いて森戸の思想遍歴を再構成する必要がある。

また、戦前期、研究者としての森戸は、エンゲルの著書『ベルギー労働者家族の生活費』（昭和16年、栗田書店）、『労働の価格・人間の価値』（昭和17年、栗田書店）を翻訳し、生産力増強に資した科学的管理法・テイラーシステムの紹介者でもあった⁽¹⁴⁾。女子労働についての実証研究についても、大正8年（1919年）より明らかにしており⁽¹⁵⁾、それは、『大原社会問題研究所雑誌』でも、昭和5年（1930年）に「日本における女子の職業的活動——その範囲及び動向」として明らかにしている⁽¹⁶⁾。また、後に日本国憲法に第25条「生存権」を書き入れることとなる森戸は、全労働

(12) 森戸辰男（1972）『思想の遍歴』上下、春秋社。

(13) 森戸辰男（1976）『遍歴八十年』日本経済新聞社。

(14) 森戸辰男（1916）「科学的管理法ノ社会政策的価値（一）（二）」『国家学会雑誌』第357・8号。

(15) 森戸辰男（1919）「日本に於ける女子職業問題」社会政策学会論叢第12編『婦人労働問題』。

(16) 森戸辰男（1930）「日本における女子の職業的活動——その範囲及び動向」『大原社会問題研究所雑誌』第7巻第3号。他に、森戸辰男（1933）「職業婦人の労働生活条件——婦人労働問題調査の一節」『大原社会問題研究所雑誌』第10巻第1号。

収益権、労働権、生存権を定置させたアントン・メンガーの『全労働収益権史論』（弘文堂書房）を大正13年に訳出、刊行していた。初期マルクス研究⁽¹⁷⁾・無政府主義研究でも当該期の先端的研究者であった森戸は、日本の社会主義運動とキリスト教との関係についても、先駆的かつ実証的な研究を行っていた⁽¹⁸⁾。

このような研究者としての森戸の再評価は、今後の課題であり、戦後の価値観において森戸をあえて無視するかのように研究がなされてきたが、この点、改めて正当に評価する時期にきているのではないだろうか。また、実践的な労働者教育、労働運動との関係、評論など多様な活動についても、多くの論文を執筆しており、再評価の必要がある。かつまた、戦後の教育問題に対する森戸の評価も、一例として国立大学法人後の国立大学の現状を勘案すれば、大きく異なってくるであろう。このためには、改めて、森戸の所蔵していた資料を再集積させたうえで、分析することが必要である。その際の導き手の一つとして労働科学研究所旧蔵森戸文庫があり、さらに、これが最大の関係文書を集積している広島大学文書館（「森戸辰男記念文庫」）に移管されたことは、自伝執筆時を再構成するだけでなく、研究を飛躍的に進ませる基盤整備の一助になったと考えている。

（こいけ・せいいち 広島大学教授、広島大学文書館館長）

(17) 高橋彦博（2001）「第一部分析Ⅲ 帝国主義下の社会科学研究所——大原社研における森戸辰男の営為」『戦間期日本の社会研究センター』柏書房、89 - 124 頁。

(18) 森戸辰男（1933）「我が国社会主義史への瞥見（一）」『大原社会問題研究所雑誌』第10巻第3号。森戸辰男（1936）「新興大衆運動における基督教的勢力の復興」『大原社会問題研究所雑誌』第3巻第2号。